

## 仁和寺とその周辺出土の尾張産瓦

柴垣勇夫

### はじめに

平安末期、12世紀前半代を中心に瀬戸内から東海地方の国々で焼成された瓦が平安京の院家建築に使用されていたことがこの十数年来、明らかにされてきた。尾張国で焼成されたものも洛南の鳥羽離宮と、右京の仁和寺南院・法金剛院での使用が判明している。

このうち、鳥羽離宮で使用された瓦については、焼成した古窯跡（生産地）が数か所以上にのぼることが明らかになってきて、その背景には、単なる荘園領主との関係ではなく、当時大きな勢力となりつつあった受領国司層が大いに関わりをもった需要と供給であったことがいわれるようになった。

もう一つの供給先であった仁和寺南院や法金剛院については、これまで判っていた生産窯がわずかに東海市社山古窯と常滑市～半田市半田池周辺窯と漠然と呼ばれた地域の2か所程度であったため、その供給背景には荘園関係が重視され、本所への荘園領主からの瓦の献納という現象と理解される意見が支配的であった。

しかし、まだ僅かな例ではあるが、仁和寺周辺出土の尾張産瓦が何か所か知られるにつれ、鳥羽離宮と同様に、尾張の中での焼成地域が数か所、しかも広汎な地域に渡ることが明らかになりつつある。

以下に、仁和寺周辺における尾張産瓦の出土例と、判明し出した生産窯出土瓦を眺め、若干の考察を試みよう。

### 1. 仁和寺北院付近出土の軒平瓦

第3図は、昭和10年前後に仁和寺前道路が整備された際出土したといわれ、現仁和寺の西に隣接していた北院に使用されていたものと推定されている瓦である。

左右端からそれぞれ中央にむかって、三枝葉を単位とした唐草が三反転する、内行唐草文とも呼ぶ文様が浮彫りされ、文様周辺に細かく珠文を配した軒平瓦で、全長（上弦巾）23.4cm、厚さ5.7cmを測るものである。1987年、常滑市上白田古窯<sup>じょうはくた</sup>で検出された軒平瓦<sup>(注4)</sup>（第4図4）がこれにあたり、生産窯と供給先が明らかとなった例である。上白田古窯のものは、小片で、当初、上下に配された唐草が右から左へ扁行していくものと推定されていたが、この仁和寺出土例によって、全体文様が内行均整唐草文であることが判った。

個人所蔵のものであるが、出土地もほぼ誤りのないものとされ、1989年にコレクション瓦の図録の中で公表された。<sup>(注5)</sup>これによって、全体の文様構成を知ることができたものである。

### 2. 仁和寺南院出土の軒平瓦

仁和寺周辺で尾張産瓦が出土することの報じられたのは、1962年発刊の奈良国立文化財研究所学報第11冊<sup>(注6)</sup>が最初である。第1図は同書図版に加筆した各院家の位置である。

1960年から61年にかけて、「仁和寺の美術資料の調査と研究」に関連して、院家建築の研究を

進めていた奈良国立文化財研究所の杉山信三氏によって、仁和寺南院と推定される地域の発掘調査が実施された。その結果、一間四面の御堂一棟が検出され、これに葺かれたと思われる瓦が採集された。報告書には、11点の軒瓦が写真掲載され、「表面はすべて暗緑色を呈する灰釉がかけられていた」と述べられ、「1個だけ出土した軒丸瓦は崩れた複弁蓮花文を、多数に出土した軒平瓦には、花菱文・宝相花文・唐草文がついていて、平安時代末期のものであることを示している」と報告されている。この補注には、この南院跡出土瓦の3分の2以上は、意識的に灰釉をほどこしたものであると記されていて、この御堂がおそらく尾張産瓦のみで葺かれたものであったと推定されるのである。

この南院跡出土瓦で広く知られるのは、第2図に掲載した宝相華文軒平瓦であるが、この生産窯はまだ知られていない。しかし、同時に出土している花菱文（覗き花文）軒平瓦はかつて杉崎章氏によって紹介された半田池古窯出土例が同文で、おそらく同範と思われる、生産窯を知多半島の中央部に限定できるものである。半田池古窯と呼称されるものの実態は不明であるが、半田池周辺の古窯という意味と思われ、常滑市と半田市、阿久比町の二市一町が境をなす位置にある半田池の常滑市側には北部に濁池北古窯があり、京都・神泉苑出土とされる宝相華文軒丸瓦と同文異範の軒丸瓦が出土している。従って、この地区で宝相華文や花菱文を主文様にした軒瓦が生産されていたことはまちがいない。

さらにもう一点掲載されている唐草文軒平瓦は、前述の仁和寺北院出土の常滑市上白田古窯生産瓦と同文である。この上白田古窯については、後述するが、半島中央部の半田池や濁池の地域からは、約4km西にあって海岸まで1.4kmと近く、伊勢湾に面する大野の港へは北へ直線距離で約2.5kmを測る場所に位置する。いずれにしても、知多半島中央部と海岸寄りのかかなり距離の離れた2か所以上の地域で焼成されたものがこの仁和寺南院へ運ばれていることが判明してきた。

なお、鬼瓦の破片が同報告書に掲載されているが、これまでのところ、同範と思われる古窯出土品はない。常滑市濁池古窯出土の鬼瓦に類似品があるが、異範である。

### 3. 法金剛院出土の軒丸瓦、軒平瓦

仁和寺の南、双ヶ岡独立丘をはさんで、直線距離で1km離れた位置にある鳥羽上皇の中宮待賢門院（璋子）の発願によって創建された法金剛院でも尾張産瓦が1968年～69年にかけて発見されている。

寺城の南、山陰線に併行する東西道路の拡張工事に伴い、境内の一部が破壊されることとなり、事前の発掘調査が実施された。その結果、建物2棟と築地遺構、池の汀線などの遺構が検出されたほか、築地の東溝（寺城側）の中に多数の軒先瓦が採集されたのである。

これまで知られていた尾張産瓦は、東海市社山古窯で焼成された、巾広の素縁のめぐる複弁八葉蓮花文軒丸瓦（ARN2の軒丸瓦）のみで、大半は、播磨産瓦や、南都系（大和）（第4図1）の地方産瓦が知られる程度であった。

しかし、このほど、仁和寺北院出土の内行唐草文軒平瓦の公表によって、法金剛院においても、常滑市上白田古窯で焼成されたと考えられる軒平瓦が出土していることが明らかとなった。すなわち、報告者が軒平瓦類の第6類（報告書第57図49）として『勾玉状』文軒平瓦（BGS）（第4図3）と分類された、瓦当部左隅の小片で、中央に勾玉状の突起が横一列に3点と周辺に珠文

帯を配したものが、この内行唐草文軒平瓦で、同範の確認はできていないが、文様構成からみて、ほぼまちがいなく常滑市上白田古窯産の瓦である。

さらに、報告でA T N 3とされた軒丸瓦類第2類の巴文軒丸瓦中の珠文をめぐるさないタイプの小型品が、<sup>(注20)</sup>『焼成すこぶる硬く、表面に灰色の釉が塗られているのが特徴で……、瓦当面が全体的に内窩している』ところから、尾張産瓦と考えられるものである。直径12.3cmで外区素縁巾が1.8cm、内区右まわり巴文の直径が7.2cmを測る（第4図2）が、この規模の軒丸瓦は、名古屋市天白区八事壹野古窯出土の左まわり巴文とほとんど同じ大きさで、巴文様の尾に差異があって法金剛院出土例の方が短い。この種の小型巴文軒丸瓦は、八事裏山古窯<sup>(注21)</sup>でも焼成されていて、鳥羽離宮東殿の地へ運ばれていることが判っている。<sup>(注22)</sup>

おそらく、この右まわり三巴文軒丸瓦の生産窯は、名古屋東部・猿投窯東山地区の八事支群中におくことのできるものと思われる。

以上のように、法金剛院内のいずれかの建物に使用された尾張産瓦には、知多半島北部の東海市社山古窯、同中央部の常滑市上白田古窯（この間は約10kmの距離がある）および名古屋市天白区八事地域の3か所のものが認められるのである。

#### 4. 常滑市上白田古窯出土の軒平瓦片<sup>(注23)</sup>

上述してきたように、仁和寺とその周辺地域3か所から、期せずして内行唐草文軒平瓦が出土していることが判明してきたが、その生産地は、1987年に常滑市教育委員会によって発掘調査された常滑市大字金山字上白田18に所在した上白田古窯である。

この古窯は2基近接して築窯されていて、1号窯から窯内出土遺物が検出されている。焼成室の一部が残存する2号窯も、1号窯の窯内、灰原に類似の山茶碗を主体にしていて、ほぼ同時期の操業と考えられている。軒平瓦の小片は、灰原出土で、1号窯の焼成品とみられている。

主な出土遺物は、広口瓶、短頸壺、壺、甕、片口鉢、特殊小型台付小杯（より合わせた粘土紐を角形の台にして、その上に小杯を2ヶ置く）、玉縁口縁碗といった製品のほか、多数の山茶碗、小皿類である。こうした器物のほか、図示の軒平瓦小片1点、丸瓦、平瓦、熨斗瓦類が多数採集されていて、本窯において瓦生産が行われていたことを示していた。

仁和寺とその周辺から出土した瓦と同文の内行唐草文軒平瓦（第4図4）は、縦5.0cm、横4.2cmの小片で文様部分の残存状況も極めて少ない。しかし、内区の文様構成は、前述の仁和寺北院出土瓦との比較において、唐草文様であることはまちがいなく、外区に1cm～1.5cm間隔で珠文がめぐることの判るものである。

この内行唐草文軒平瓦の類似文様として、12世紀前半代の京都・栗栖野瓦窯で生産されたと考えられる軒平瓦が京都市中京区烏丸通三条上ルの三條西殿跡から出土している。三條西殿は12世紀初めに白河法皇が御所としていたことで知られる邸宅で、<sup>(注24)</sup>鳥羽天皇の中宮璋子（待賢門院）も中宮御所（里第）として1118年から1130年頃まで活用した。この軒平瓦のような内行唐草文を高麗系の軒先瓦とする意見があるが、むしろ朝鮮文化の移入に影響されつつも、それまでの軒先瓦の文様を平安後期の華やかな文化風潮の中でアレンジしたり新たに創造していったものと考えられる。<sup>(注25)</sup>おそらく白河法皇・待賢門院のどちらかの時期にこの三條西殿で使用された瓦で、これを



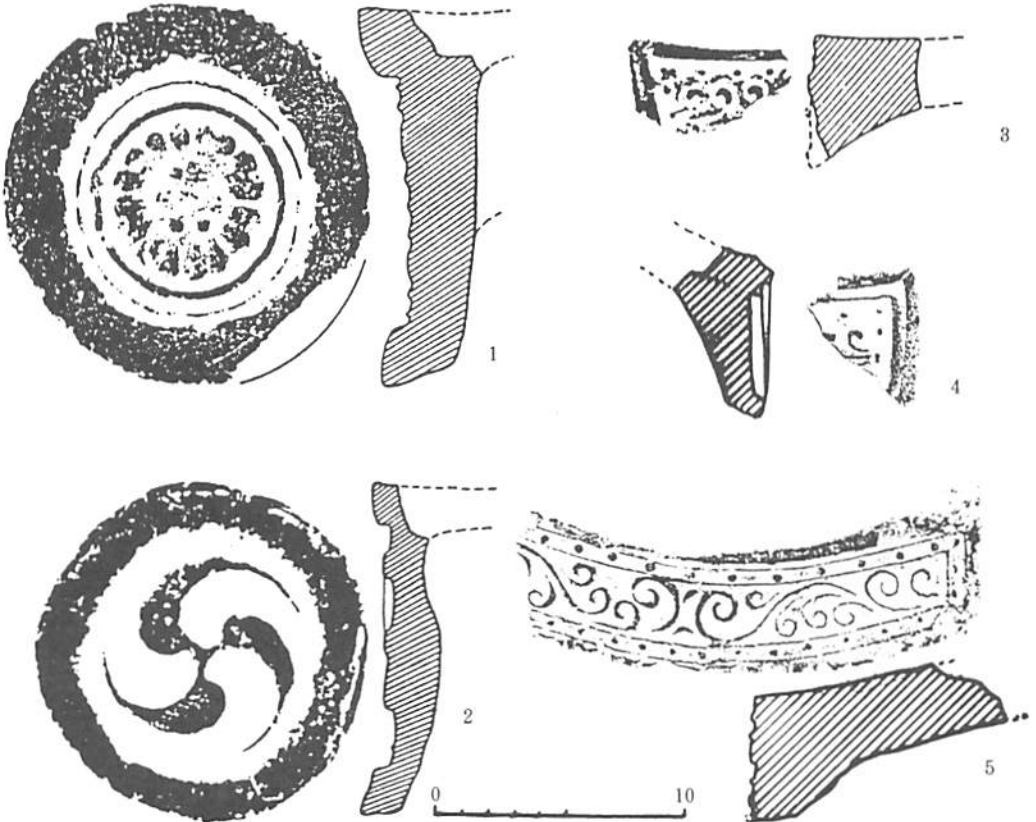
第1図 仁和寺付近尾張産瓦出土地(注6文献に加筆)  
1.仁和寺北院 2.同南院 3.法金剛院



第2図 仁和寺南院出土宝相華文軒平瓦(注8文献『古代の瓦』より)



第3図 仁和寺北院出土内行唐草文軒平瓦(注3文献『古瓦図考』より)



第4図 法金剛院出土瓦(1~3)、常滑市上白田古窯出土瓦(4)、三條西殿跡出土唐草文軒平瓦(5)(各報告書より)

原型として、仁和寺周辺の造営に際して尾張・上白田古窯産の軒平瓦の基本文様が作られたものであろう。第4図5が三條西殿跡出土瓦を2片重ねあわせて合成したものであるが、仁和寺北院出土瓦と珠文をめぐる圏線が省かれている点を除けば、よく似た構成の内行唐草文であることが判る。

## 5. 運ばれた瓦の生産時期とその背景

ところで上白田古窯で生産されたこの軒平瓦は、何時生産されたのであろうか。

法金剛院は、待賢門院の御願により大治5年(1130)から建立され出すが、瓦葺の建物は保延2年(1136)に三重塔と経蔵が建立されている。一方、仁和寺南院も1131年から高野御室(覚法門跡の御室)として堂塔の建立が始まるが、保延元年(1135)に瓦葺の丈六堂が建設されている。<sup>(注26)</sup>

仁和寺北院は、三条天皇の皇子性信の住房として観音院の建立され出す1074年から1105年にかけて堂塔が建設される。しかし火災が何度もあり、今のところ尾張産瓦を堂塔の創建年代に一致させることはできない。

以上の事柄から、ほぼ12世紀第2四半期の早い段階にこの上白田古窯の操業期の一点を置くことができると思う。おそらく仁和寺南院の出土瓦の様子からみて、創建時の瓦が尾張から運ばれたものと考えて大過ない。同様に待賢門院が三條西殿を邸宅としていたからみから、法金剛院の堂塔のうち瓦葺堂宇についての創建時の瓦を三條西殿で使用された文様に類似の瓦当文とし尾張で作らせ運ばせたものと考えたい。

この尾張における瓦生産の様相については、鳥羽離宮出土瓦をもとにすでに述べているところであるが、いま一度整理してみよう。この仁和寺周辺出土瓦においても、知多半島内で10km離れた<sup>(注27)</sup>2地点からさらに東山地区八事古窯跡群中からの可能性を含めれば、実に30km離れた地域で焼成された瓦が同時に仁和寺付近へ運ばれたこととなる。

ここでも鳥羽離宮と同じように荘園と本所という関係ではなし得ないほどの広範囲な地域からの供給現象がみられるところから、当然、国司層の関わりが瓦生産の背景にあることが想定される。院政期における寺院・宮殿の造営が各国に割りあてられたことと、これを積極的に利用し、自らの地位の安泰・継続をはかる国司層の動きが窯業生産の盛んな尾張において、当時の日常容器と共に瓦を併焼させるいわゆる瓦陶兼業窯を創出させたのであった。

最近、京内および瀬戸内各地のこの期の遺跡調査が進み、11世紀代に丹波、備前、備中、備後、周防の国々、やゝ遅れて播磨、讃岐、阿波、淡路といった国々の瓦が量の差はあるけれども京へ運ばれていることが明瞭となってきた。12世紀代に播磨系、尾張系、南都系、京都周辺官衙瓦窯が中心となる瓦供給の<sup>(注28)</sup>前史が各国平均課役的に瀬戸内諸国に認められるようになってきた。この現象をどう理解するかが、古代と中世の分岐、ひいては中世窯業の成立時点の問題にかかわって来るようである。尾張における瓦陶兼業窯出現前の瓦生産の解明と初期山茶碗窯の生産体制の把握がこのことに関わるものと思われる。

- 注1. 拙著「尾張における平安末期の瓦生産」『愛知県陶磁資料館研究紀要』1 1982
- 注2. 杉崎章「常滑窯業の歴史」『常滑窯業誌』1974
- 注3. 廣田長三郎編『古瓦図考』資料№160 ミネルヴァ書房 1989
- 注4. 常滑市文化財調査報告第16集『上白田古窯址群』常滑市教育委員会 1988
- 注5. 注3に同じ。
- 注6. 杉山信三『院の御所と御堂—院家建築の研究—』奈良国立文化財研究所学報第11冊 1962
- 注7. 注6文献中、P142~143 PL.13.14 「2.仁和寺南院跡発掘調査報告」
- 注8. 注7文献PL.14の4および稲垣晋也『古代の瓦』日本の美術66(第11図)至文堂 1971
- 注9. 注2文献、P97. 図版中、半田池古窯として掲載の瓦。
- 注10. 注8文献中、第10図の軒丸瓦。
- 注11. 杉崎章ほか『権現山古窯址』白菊古文化研究所 1965および注1文献。  
杉崎文献で挿図第11の13に久米御林古窯址出土として掲載された軒丸瓦と同範の軒丸瓦で濁池北古窯出土とされるものが注1文献図3の4である。
- 注12. 注7文献 PL.14の7
- 注13. 注4に同じ
- 注14. 注7文献 PL.14の12
- 注15. 中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1970
- 注16. 杉山信三「法金剛院発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1969
- 注17. 注15文献第53図4
- 注18. 杉崎章ほか「社山古窯」『横須賀の遺跡』所収 1956および注11『権現山古窯址』1965
- 注19. 注3に同じ
- 注20. 注15文献第54図17
- 注21. 注11文献挿図11-8.9および注1文献図2の11
- 注22. 名古屋考古学会裏山1号窯調査団「八事裏山1号窯第三次発掘調査報告」古代人43. 1984
- 注23. 注4に同じ
- 注24. 植山茂ほか『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告第7輯 古代学協会 1983
- 注25. 植山茂「日本古代の瓦にみる新羅・高麗系要素」『京都朱雀文化博物館研究紀要第2集』1989
- 注26. 注6文献による。
- 注27. 注1文献および『吉田第1号窯、第2号窯発掘調査報告書』大府市教育委員会 1969.1975
- 注28. 上原真人「瀬戸内海を渡ってきた瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ—もの・ひと・みち—』帝塚山考古学研究所 1987